

当院における血液製剤廃棄削減への活動と効果

◎柴田 竜也¹⁾、久住 裕俊¹⁾、村越 大輝¹⁾、栗田 美咲¹⁾、福田 由希子¹⁾、白川 るみ¹⁾、平松 直樹¹⁾
地方独立行政法人 静岡県立病院機構 静岡県立総合病院¹⁾

【はじめに】

血液製剤は献血者より提供される貴重な資源であり廃棄量を減少させることは重要である。当院は2016年に輸血管理料Ⅰと輸血適正使用加算を取得し、輸血管理体制の構築、輸血療法の安全かつ適正な実施を推進している。輸血療法委員会および輸血部門では、血液製剤の使用・廃棄状況の確認、在庫数見直し、インシデントの共有、診療科への各種情報提供、マニュアルの改訂、研修会の開催を実施している。今回、血液製剤の廃棄削減への活動から廃棄率変化による効果の検証と廃棄要因を追求することで、今後の課題を明確にした。

【対象・方法】

2011年4月から2023年3月までの12年間に購入した血液製剤を対象とした。期間をⅠ期（2011～2014年度）Ⅱ期（2015～2018）Ⅲ期（2019～2022）に分け、各期間の廃棄率を比較した。廃棄要因は部門システムへの登録内容および所定の様式に記載されたデータをもとに検討した。

【結果】

Ⅰ期からⅢ期にかけて全ての血液製剤で購入量は増加し、廃棄量は赤血球製剤（RBC）、血小板製剤（PC）では漸減し、新鮮凍結血漿（FFP）では漸増した。血液製剤の廃棄率はⅠ期（0.70%）Ⅱ期（0.72%）Ⅲ期（0.45%）であり、Ⅲ期にかけて各製剤とも減少した。廃棄要因は期限切れによる廃棄が最多であり、血液型割合ではRhD陰性製剤が主であった。また、Ⅰ期からⅢ期にかけて返品期日遅れによる廃棄数は減少したが、不適正保管やFFPの破損による廃棄数は減少していなかった。

【考察】

当院における血液製剤廃棄率は12年間で漸減した。輸血療法委員会を中心に医師や看護師、臨床検査技師に向けて廃棄率や返品状況の情報共有を行うことで廃棄削減への意識変化につながったと考える。一方、廃棄要因として血液製剤の不適正保管や破損による廃棄数は減少しなかった。血液製剤の取り扱いに関する通知や注意の直後は改善されるが繰り返し発生する。また、輸血療法に携わる医療スタッフは多岐にわたり、特に看護師や看護助手は入れ替わりが多いため血液製剤の取り扱いに関して教育が十分でなかった可能性がある。人為的な要因における廃棄削減には運用の周知だけではなく、運用を具体的に理解するための定期的な教育が必要である。

【結語】

血液製剤の廃棄率は減少したが人為的な要因による廃棄製剤は減少していないことが明らかになった。輸血療法に携わるすべての医療スタッフへ向けた継続的な教育が望まれる。